



PRESS RELEASE

東京芸術祭2018 プランニングチーム発表 および 『野外劇 三文オペラ』上演のお知らせ

東京芸術祭2018、「プランニングチーム」メンバー発表。 『野外劇 三文オペラ』上演 (12月、出演者オーディション開催)。

「東京芸術祭」は、東京2020オリンピック・パラリンピック大会、さらにはその先まで東京に世界から人が集まり、東京の魅力を満喫できることを目指す芸術祭として、2016年にスタートしました。

2018年から2020年まで、東京芸術祭総合ディレクターとして宮城聡氏（演出家/東京芸術祭APAF-アジア舞台芸術人材育成部門プロデューサー/SPAC-静岡県舞台芸術センター 芸術総監督）が就任することに加え(2017年3月発表)、このたび「プランニングチーム」のメンバーを発表いたしました。東京芸術祭は2018年から、宮城総合ディレクターと「プランニングチーム」のメンバーが協働し展開いたします。前年同様にフェスティバル/トーキョー、芸劇オータムセレクション、としま国際アート・カルチャー都市発信プログラム、APAF-アジア舞台芸術人材育成部門などを据えながら総合ディレクター直轄プログラムなど、一層幅広いプログラムで実施する予定です。

また、東京芸術祭2018の目玉プログラムとして、イタリアを代表する演出家 ジョルジオ・バルベリオ・コルセッティ氏による『野外劇 三文オペラ』（会場：池袋西口公園）の上演も予定しております。本プログラムは12月に出演者オーディションを行います。

東京芸術祭 総合ディレクター(2018-2020)



撮影：新良太

宮城 聡 (みやぎ・さとし)

1959年東京生まれ。演出家。SPAC-静岡県舞台芸術センター芸術総監督。東京大学で小田島雄志・渡辺守章・日高八郎各師から演劇論を学び、1990年ク・ナウカ旗揚げ。国際的な公演活動を展開し、同時代的テキスト解釈とアジア演劇の身体技法や様式性を融合させた演出で国内外から高い評価を得る。2007年4月SPAC芸術総監督に就任。自作の上演と並行して世界各地から現代社会を鋭く切り取った作品を次々と招聘、「世界を見る窓」としての劇場づくりに力を注いでいる。2014年7月アヴィニョン演劇祭から招聘された『マハーバーラタ』の成功を受け、2017年『アンティゴネ』を同演劇祭のオープニング作品として法王庁中庭で上演、アジアの演劇がオープニングに選ばれたのは同演劇祭史上初めてのことであり、その作品世界は大きな反響を呼んだ。他の代表作に『王女メデア』『ペール・ギュント』など。2006年よりAPAF(アジア舞台芸術祭)プロデューサーをつとめる。2004年第3回朝日舞台芸術賞受賞。2005年第2回アサヒビール芸術賞受賞。

●貴媒体でのご紹介・取材をご検討くださいますようお願い申し上げます。

<本リリースに関するお問い合わせ>

アーツカウンシル東京 (公益財団法人東京都歴史文化財団) 広報担当：森 (隆)、圓城寺

Tel : 03-6256-8432 E-mail : press@artscouncil-tokyo.jp

<東京芸術祭に関するお問い合わせ>

東京芸術祭組織委員会事務局

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-18-1 国立能楽堂内 公益社団法人 国際演劇協会日本センター気付

Tel : 03-6388-0119 Fax : 03-3478-7218 E-mail : info@tokyo-festival.jp

プランニングチーム (順不同)

東京芸術祭は、2018年から宮城総合ディレクターと「プランニングチーム」のメンバーが協働し展開いたします。「プランニングチーム」メンバーの内、下記の5名を発表いたしました。

■ 直轄事業ディレクター 横山義志 (よこやま・よしじ)



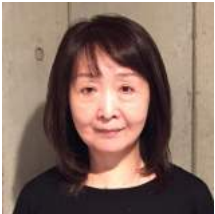
1977年千葉市生まれ。中学・高校・大学と東京に通学。2000年に渡仏し、2008年にパリ第10大学演劇科で博士号を取得。専門は西洋演技理論史。2007年からSPAC-静岡県舞台芸術センター制作部、2009年から同文芸部に勤務。主に海外招聘プログラムを担当し、二十数カ国を視察。2016年、アジア・センター・フェロウシップにより東南アジア三カ国視察ののち、アジア・カルチュラル・カウンシル (ACC) グランティーターとしてニューヨークに滞在し、アジアの同時代的舞台芸術について考える。学習院大学・静岡県立大学非常勤講師。論文に「アリストテレスの演技論 非音楽劇の理論的起源」、翻訳にジョエル・ポムラ『時の商人』など。舞台芸術制作者オープンネットワーク (ON-PAM) 理事、政策提言調査室担当。

■ 芸劇オータムセクションディレクター 内藤美奈子 (ないとう・みなこ) - 東京芸術劇場 制作担当課長



プロデューサー。東京大学文学部卒業。1985年よりパルコ劇場にて、1998年よりホリプロ・ファクトリー一部にて、2010年より東京芸術劇場にて、演劇・ダンス・ミュージカル・海外公演・国際共同制作等の企画制作、海外公演の招聘などに従事。
 <主な作品>【演劇】「おのれナポレオン」(三谷幸喜作・演出)、「リチャード三世」(シルビウ・ブルカレーテ演出) 【朗読】「ラヴ・レターズ」(青井陽治演出)、ミュージカル「ファンタスティックス」(宮本亜門演出) 【海外公演】「THE BEE English Version」(野田秀樹作・演出) 世界10都市ツアー 【国際共同制作】「トロイアの女たち」(蜷川幸雄演出/東京芸術劇場・テルアビブ カメリ劇場共同制作) 【招聘公演】「タデウシュ・カントール&Cricot2“くたばれ芸術家”“私は二度と戻らない”」、ブロードウェイ・ミュージカル「CHICAGO」、ロイヤル・シェイクスピア・カンパニー

■ としま国際アート・カルチャー都市発信プログラムディレクター 根本晴美 (ねもと・はるみ) - あうるすぽっと (豊島区立舞台芸術交流センター) 制作統括 チーフプロデューサー



大学卒業後、劇団四季に社員として入社。翌年ニューヨーク大学大学院パフォーマンススタディ専攻へ留学。帰国後は、こどもの城に併設されていた青山劇場・青山円形劇場運営部に入社し、演劇・舞踊や子どものための舞台芸術の企画制作、またローザンヌ舞踊コンクール東京開催事務局、海外共同制作ミュージカルの制作などに携わる。出産・子育てを経て、1996年世田谷パブリックシアター開設準備室に入室。日本初の創造発信型公共劇場のプロデューサーとして、演劇、ダンス、子どもプロジェクト、ワークショップを開催、地方公共劇場との連携事業などを開館から19年間手掛け、劇場のステイタスの確立に貢献。2016年4月より現職。

■ としま国際アート・カルチャー都市発信プログラムディレクター 杉田隼人 (すぎた・はやと) - 公益財団法人としま未来文化財団 みらい文化課 プランセクション事業企画担当



民間企業、公立ホール、ヨコハマトリエンナーレ事務局等での制作を経て、2012年よりとしま未来文化財団に在職。現在までに「としま能の会」「民俗芸能inとしま」「ジュニア・アーツ・アカデミー狂言コース」「伝統芸能in自由学園明日館『獅子の祝祭』」などを担当。2016年東京芸術祭参加作品「大田楽 いけぶくる絵巻」を企画制作。南池袋公園を中心に、池袋の街中で上演、コスプレイヤーとのコラボレーションも話題となった。伝統芸能分野における新たな観客層の創出に努めている。

■ APAFディレクター 多田淳之介 (ただ・じゅんのすけ) - 演出家



Photo やじまえり

1976年生まれ。演出家。東京デスロック主宰。富士見市民文化会館キラリふじみ芸術監督。古典から現代戯曲、ダンス、パフォーマンス作品までアクチュアルに作品を立ち上げる。「地域密着、拠点日本」を標榜し、全国地域の劇場・芸術家との地域での芸術プログラムの開発・実践や演劇を専門としない人との創作、ワークショップも積極的に行い、演劇の持つ対話力・協働力を広く伝える。海外共同製作も数多く手がけ、特に韓国、東南アジアとの共作は多い。主宰する東京デスロックは2009年以降東京公演を休止。2013年に東京復帰公演を行うも現在は2020年東京オリンピック終了まで再休止している。2014年韓国の第50回東亜演劇賞演出賞を外国人として初受賞。2010年キラリふじみ芸術監督に公立劇場演劇部門の芸術監督として国内史上最年少で就任。高松市アートディレクター。四国学院大学非常勤講師。セゾン文化財団シニアフェロー対象アーティスト。

■ フェスティバル/トーキョーディレクター

※年度末までに開かれるフェスティバル/トーキョー実行委員会において決定後、発表。

東京芸術祭2018 プログラム

『野外劇 三文オペラ』

作：ベルトルト・ブレヒト 音楽：クルト・ヴァイル 訳：大岡淳
 演出：ジョルジオ・バルベリオ・コルセッティ

東京芸術祭2018では、イタリアを代表する演出家ジョルジオ・バルベリオ・コルセッティ氏による音楽劇、『野外劇 三文オペラ』を池袋西口公園にて上演いたします。

■ 公演概要

『野外劇 三文オペラ』

作：ベルトルト・ブレヒト 音楽：クルト・ヴァイル 訳：大岡淳

演出：ジョルジオ・バルベリオ・コルセッティ

総合ディレクター：宮城聰（演出家、SPAC-静岡県舞台芸術センター芸術総監督）

◎日程 2018年10月(予定) [東京芸術祭2018会期中] ◎会場 池袋西口公園 (予定)

■ 総合ディレクター宮城聰より

いまの東京には、「劇場に行く楽しみを知っている人」と「それを一切知らない人」の2種類の人々がいます。

人数から見ると、前者は後者よりずっと少数です。もちろん、劇場にはキャパシティの限界がありますから、電波やネットのようにいかに数万人の人が見ることはできません。なので少数であること自体は当然で、劇場に来ない人たちも「劇場という場所ではなにか面白いことが起こっているらしい」という興味を持ってきている状態ならばそれは心配に及ばないでしょう。

しかしいまの東京では、前者の人々と後者の人々のあいだに深い溝ができています。ふたつのグループはくっきりと分かれてしまって、前者のメンバーは固定化しつつあります。

こういう状況で劇場にたくさんの観客を呼ぼうとすれば、テレビの人気者に出演してもらわなければなりません。人気者たちはさすがの名演を見せてくれることもありますが、チケット代は高くなります。高くなっても売れることがわかると、もう安くはならないものですね。こうして前者と後者の溝はいっそう深くなるばかりです。

そこで東京芸術祭2018では、このスパイラルに抗う一撃を企画しました。それがこの『野外劇 三文オペラ』です。

まず、劇場を飛び出し、池袋西口公園で、囲いさえ作らずに上演します。チケット代は「三文」、というわけにはいきませんが、ワンコインにします。遠巻きに眺めるぶんにはタダです。そういう方々に音だけでも楽しんでもらえるよう、音楽劇を選びました。途中から観ても良いし、途中で立ち去ってもかまいません。

ただし、クオリティは一流でなければ意味がありません。「敷居が下がったぶん、クオリティも下がった」となるとは、演劇とは面白くないもの、という先入観を払げる役にしか立ちません。

演出家は、手練れの中の手練れ、G・B・コルセッティ氏を招くことにしました。氏が日本人俳優を演出するのは初めてです。出演者は全員、ネームバリューや人脈を顧慮しない、実力本位のオーディションでコルセッティ氏本人が選びます。稽古期間もじゅうぶんに確保して、熟達の演出家が思うさま腕をふるった芝居がいかにも楽しいものかを存分に味わっていただけるようにと考えております。

ぜひ、東京芸術祭2018『野外劇 三文オペラ』にご注目ください。

■ 演出 ジョルジオ・バルベリオ・コルセッティ (Giorgio Barberio Corsetti)



現代イタリア演劇を代表する演出家の一人。1951年ローマ生まれ。1976年にベネチア・ビエンナーレで映像を交えた新たな劇言語を提示し、話題を呼ぶ。1988年からカフカ四部作を演じ、『アメリカ』では毎日異なる道を行く俳優たちのあとを観客が追っていく形式を試みる。1994年、「ヨーロッパ演劇の新たなリアリティ」賞受賞。1999年、ベネチア・ビエンナーレ演劇部門の芸術監督に就任し、サーカス作品にも門戸を開く。2001年、カフカにちなんで自らの劇団を「ファットーレ・K」と名づける。2012年コメディ＝フランセーズで初演出。2014年、アヴィニョン演劇祭開幕演目として法王庁中庭で『ホンブルクの公子』を演出。オペラ演出も数多く手がけ、ミラノ・スカラ座では『トゥーランドット』等を演出。

日本では、ラフォーレミュージアム赤坂にて、1991年『ラ・カメラ・アストラッタ/抽象の部屋』、1992年『ある戦いの描写 カフカの作品より』を上演。また、SCOTサマー・シーズン2008にて『ロナルド・マクドナルドの物語』、SCOTサマー・シーズン2009にて『天と地のはざま』を上演したほか、2016年には東京文化会館で上演されたゲルギエフ指揮によるマリインスキー・オペラ『ドン・カルロ』を演出。

出演者オーディション開催

本プログラムは全出演者をオーディションで決定いたします。

エントリー受付期間 2017年11月30日(木)～2017年12月10日(日)※必着

▶詳細・概要はWebを御覧ください。 <http://tokyo-festival.jp/news/1332/>